青年期の言語発達とその環境
―調査研究へ向けた準備的考察―

椿　田　貴　史

まえおき

ある大学で文章表現の授業を担当している高松（2003）によれば、writing skill の教育実践には、それを「根底から支える理論」が是非とも必要であるという。筆者も短いながら、これまで計 6 年間、高等専門学校を含む高等教育機関において学生のレポートやテスト類を読んできた。延べ人数にすると約 3000 名のテスト類の採点をしてきたことになる。その中で、文章表現力のみならず、彼らの自己表現力や社会性に裏打ちされた表現作法を身につけさせることの難しさを実感している。文章表現技術の教育にたずさわっている者であれば、その思いはなおさらであろう。

これは何も日本に限ったことではない。イギリスで教鞭を執る Read, B. (2001) らは、学生が大学において要求される essay writing の技術を、大学という独特な文化における codes としている。つまり学生が essay で良い成績を修めるためには、そうした codes をまず読み解かねばならないのである。彼らは社会学的な観点から学生へインタビューをし、学生たちが教員に比べて知識面で劣っていることを自覚している点、教員の権威的な態度に萎縮して自分の意見を書かず、むしろ評価者に受け入れられるような意見を書くこと、提出物に関する academic な慣習が学生にはわかりにくいことなど、さまざまな理由から essay を書くということが学生にとって困難となることを指摘した。Read, B. らの問題の文脈においては、いかにして学生が自分の“声（voice）”を essay の中に、academic な作法に則って表現できるようになるのか、ということが重視されている。

しかし、筆者は生態学的心理学の視点から、文章表現技術の“獲得”や“学習”といった教育訓練ではなく、今の青年期にある若者たち（主に大学生）が、言語とどのような関係を“切り結んでいる”のかを考察する必要性を感じている。

文章表現技術に関する教育的文脈においては、多くの場合、文章表現や言語がもつ規範的側面（規約）を伝達することに重点が置かれる。その規範は、短期間で変化するものではない。もちろん、規範は時代とともに変化するであろうが、変化の速度は数十年というゆっくりとしたものだろう。ところが、現代の学生が文字情報を入力したり、送ったりするツールの類は、技術的な変化のスピードが速い。ハードウェア及びソフトウェアの技術革新のめまぐるしい早さの中で、学生たちは新しい表現法（顔文字、ワンギリなど）を獲得し、独特の表現方法でメッセージを伝達し合っている。もちろん、われわれ教育する側も、そうしたツールに頼りながら、言語を使用している。従って、文章表現技術や学生の自己表現に関わる言語教育を「根底から支える理論」を構築するに際し、まず、実際に学生たちがどのような言語環境と言語発達過程にあるのかを考えねばならない。その上で、今日の言語活動を巡る環境が学生の言語能力の発達をどのような方面へと促進するか、あるいは抑制しているのかを検証して

ゆく必要がある。本稿はその基礎作業のための若干の思弁的考察である。

1. 青年期における言語発達と言語環境

1-1. 青年期における言語発達

青年期における言語発達という言葉は、どこか奇妙な響きを伴っている。それは、おそらく、言語能力の成熟過程として、その比較的長い臨界期を主に幼児期から学童期、あるいは思春期までと想定していることに由来するものと思われる（Lachman, Lachman, Butterfield, 1979）。実際、言語発達の心理学的研究は圧倒的に幼児期に的を絞ったものが多い。それらの研究においては、言語との出会いによって人間精神の生まれつつある状態が観察できるという、心理学者たちの関心を引きつけるに足る現場が対象となっている。一方、青年期における言語発達ということを考えると、事情はあまり魅力的なものには映らない。感覚失語や運動性失語、その他の構音障害のない、健常な発達を遂げた青年期においては、言語機能そのものは既に成熟していると捉えられている。発達する余地があるとしても、それは外国語の習得であるとか、それまで読めなかった漢字や古文、漢文の類を読めるようにする、といった加算的な能力の獲得が想定されているのだろう。つまり、幼児期における言語獲得の過程においては、言語そのものが精神を形作るようなところがあるので研究対象として興味を惹くが、基本的な言語能力を既に獲得した青年期においては、精神形成や精神発達という文脈とは切り離されて言語発達が捉えられている場合が多いのである。

しかし、幼児が周囲の環境との相互作用のなかで言語を発達させて新たな世界観や知識、認知方略を獲得して精神形成の糧とするように、青年期にある学生も周囲の環境との相互作用のなかで言語を発達させ、精神的に発達していると想定することも十分できる。この場合の言語発達、精神発達とは、量的、質的な変化、青年期における言語を含めた広い意味での文化への参入と葛藤、社会的な規範や象徴の理解と受容、他者との言語を媒介とした関係の確立などのダイナミックな変化が含まれる。図式的に述べるならば、個人の言語能力と環境との相互作用による発達が想定できる。また、ここでの言語能力は話すこと、書くこと、理解すること、などの個々の認知的プロセスから成り立つ総合的な能力であり、環境とはそうした認知的プロセスを行使する場面を提供する象徴的な現場、道具、対人関係ということになる。

次に、今日の青年にとっての言語環境について考えたい。

1-2. 現代青年の言語環境

大学生が普段使用している言語表現ツールと大学生の言語表現活動との関係を見てゆきたい。現在、大学生の多くがパソコンを利用して文章を書いている。また、メールは携帯電話からのものが一般的になりつつあるように思われる。そこで、これらの言語表現ツールについて若干の考察をしてみたい。

パソコンのワープロソフトと共に用いられる変換ソフトは、その変換精度が上がってきた。これにより、文章単位での完全変換が可能となりつつあり、以前よく見られた“変換ミス”が減少することが考えられる。あるいは、こうした変換技術の発展に伴い、変換ミスや漢字の誤りという概念そのものが、使用者の意識から薄らいでゆくのではないかと思われる。手書きであれば、正しい漢字を書いているのかどうか、辞書で調べるようなことは頻回にあるが、そう

した煩わしさをコンピュータは軽減してくれている。また、文章が正しいかどうかを判断する主体は、もはや書き手でも読み手でもなくて、機械あるいはソフトウェアということにもなる。

さらに、一部の携帯電話や PDA（携帯情報端末）において用いられるようになった予測変換システムは、言語環境においては大きな影響を及ぼすと思われる。その概要をまず説明しよう。

筆者は PDA において、PoBox という日本語入力ソフトを使用している。これは、「名古屋商科大学」という単語を入れる際、既に、「名古屋」「商科」「大学」という各単語をソフト上で使用した履歴があれば、“n”を入力しただけで候補欄に「名古屋／中北／中澤／長野」といった候補が表示される。そして、作文する人間の作業は、その候補として現れた単語を選択することのみである。その優先順位も使用状況から刻々と変化する。一度「名古屋商科大学」という組み合わせを登録すれば、今度は「n」の入力だけで「名古屋商科大学／名古屋／中北／中澤／長野」という候補順になり、その後はより効率的な入力環境へと変化する。このシステムにおいては、自分がどのような単語をどのような順番で用いているのかを、機械が記憶してくれているので、入力の手間が省け、効率的な作文が可能となる。しかし、このシステムのもたらしたものは“効率性”だけではない。

例えば、携帯電話によってメールを作成する場合、あらかじめ何を書くかを「思考」して決めておかなくても、とりあえず任意の言葉を入れて、自由連想的に文章をつなげる、ということも可能となる。こうした文章作成のプロセスはちょうど、ダダイズムやシュールレアリズムの詩作方法に似ている。彼らにとって「詩作は思索なり」ではない。あらかじめいくつかの単語やフレーズを封筒に入れておき、シェイクしてから、落ちてきた単語やフレーズを順番にあるいは気ままに並べる、というものである。

こうした文章表現方法の実践から伺われることは、文章として表現された内容は必ずしも、われわれの思考空間に内在していたわけではない、ということである。これらのツールによって表現された事柄は、いくつかの規則に従って循環する言葉の組み合わせであり、原理上、そこに思考が介入する余地は無くても良いのである。つまり、人はこの言葉の循環や漂流を“記憶しておく”必要はなく、さらに、その言葉が循環する場は、言葉を使用する主体がコントロールできる場所でもない、ということである。よって、予測変換システムは、これまで思考のレベルで行っていたことを、機械が肩代わりしてくれているということになり、これまで前意識的に、つまり潜在的な思考の水準で行われていた言語選択のプロセスが、機械というモノの次元に外在化するようになったと捉えられる。現代の文章表現や作成に関わる技術は、こうしたインターフェースのちょっとした変化によって、「人が文章を書く」ということの意味をも変えはじめているように思われる。

実際に、こうした思考不在の文章が読み手の側で適切に消費され得るかどうかは、別途検討が必要である。しかし、とりあえず、現代の言語の入力環境が思考不在のアクロバッチックな文章作成を可能とするという点は、青年期における言語環境を考える上で重要である。この環境における言語と人間との関係は、「言語が主で思考が従」というものである。ただし、ここでの“言語”とは予測変換システムのように、人間が使用することによってその配列や順序が刻々と変化する一つのシステムを形成している。したがって、そこには人間と言語と

の相互作用的な側面が見て取れなくもない[1)]。ところが、現代の青年期にある学生の場合、この相互作用が薄まりつつあるように思われる。

2. 青年期における発達課題と言語環境

2-1. 青年期における発達課題

教科書的には、青年期の発達課題は自我同一性の確立にあるとされている（Erikson, 1959）。自我同一性という課題は、現代では青年期の長期化（つまり 30 代前半も含まれるなどと指摘されるようになったこと）に伴い、必ずしも大学時代に取り組まねばならないということではなくなった。そもそも、自我同一性の確立という発想自体、社会的な価値観が色濃く反映しているので、理論的検討が大いに必要である。例えば、現代社会においては、たった一つのアイデンティティにこだわるよりも、仕事やプライベート、友人関係といった場面に応じた役割をスマートにこなしていくことが求められる社会となりつつある。少し前に話題になった人格障害とは、こうした社会的な情勢の病理的な現れである。すると、アイデンティティはそもそも個人においても多様化、多層化しているので、必ずしもアイデンティティの確立という課題を青年期にのみ限定する必要はなくなる。しかし、筆者は以下の理由から「自我同一性の確立という発達課題に取り組む大学生」というとらえ方に賛成である。まずは、様々な役割可変性を強いられる社会情勢があるにも関わらず、大学時代は新たなことにチャレンジし、自己探求（自分探し）をする時期としてのモラトリアムを可能とする貴重な時間であることが挙げられる。大学への進学率が高くなった現在では、こうした大学の機会提供的な役割はますます社会的に重要となりつつある。もう一つの理由が、筆者の臨床的な経験からのもので、筆者が面接をする学生たちのほとんどが、自分とは何か、大学で何をしたらよいのか、というアイデンティティの確立を巡る強い葛藤に悩んでいることである。したがって、本研究においては、自我同一性の確立という課題に取り組んでいる大学生と言語環境との間の相互作用関係について、作業仮説を提示し、後の調査へとつなげてゆきたい。

2-2. 言語環境と自我の確立

学生の言語環境としてパソコンや携帯電話によるメールや文書作成のツールについて考察した。ここでは、さらに、自我の確立という課題において、これらのツールを使うことの意義を考えたい。

古来、文字を記すこと、つまり「書」は、書き手の人となりを表す重要な審美的要素を含んでいた。甲骨文字においてすら、そうした書き手（貞人）による書風の違いが指摘されている。中国の長い歴史の中で様々な書体が現れ、消えていったが、書体の確立は、当該文化のあり方を色濃く映し出していた。さらに、書とは、表現行為者の人格を自由闊達に映すものであるという文体論が、宋の時代に欧陽修によって唱えられた。文体は人そのものである、という人口に膾炙する素朴心理学的な“理論”は、我が国の文字文化のルーツにおいては、書字のレベルにおいても言われていたのである。もちろん、こうした最高水準の文字文化は、近代化の過程で世俗化されたものと、源流とのつながりを保った霊験あらたかな書の文化とに分裂することになる。しかし、書体や書に関する規範が実用的なものに

1) 言語と人間（あるいは言語と思考）の健全な関係はそのような相互作用性を有しているべきかもしれない。

なっても、一般の人々の間では、文字を紙に記すことは、その人の性格や生活を色濃く反映していたと思われる。書体の善し悪しはもちろん、筆圧、紙の選択、長さ、読み易さなどは、それ自体が一つの文字のようにメッセージの受け手に書き手の心を伝えるものであろう。

ところが、コンピュータは、こういった文字に現れる“匂い”のようなもの、文書にまとわりつくざらざらした抵抗感のようなものを無化するような結果をもたらしたといえよう。もちろん、筆者はこうした文化的な傾向をゆゆしき事態であるなどと考えているわけではない。筆者が指摘したいのは、こうした文字と人間との関係において、書き手の生の部分とでも言うべきものが、無化され、主体性を物質性の次元に込めることが困難になり、人は別な方法によって、自分らしさを表現しなければならない、ということである。

2-3. 青年期における文体

もう一度高松論文に戻ろう。彼は次のように述べている。

> 俗に「文は人なり」[2] と言われる。これは文章にその人の人格や性格、人となりが現れるという意味ではない。そういうこともあるかもしれないが、文章に実際に現れるのは、その人が何を考えているかである。普段からどのようなことを、どの程度の深さで考えているのかが現れる。

つまり、考えていることや“深い”思考がまず先にある。言語表現技術などという小手先の技術を学んだとしても、それを用いるに足る“思想”という内実がなければそれほど意味はない、と彼は述べている。上の引用に続けて彼は、「普段ろくに考えてもいないことを、いざ書く段になって急に思いついたように書いてみたところで良い文章は書けない。これは絶対である」と述べ「対象を、観念としてではなく、実感として捉えられているかどうかが、その文章を支える力となる」と断じている。

文体とは人そのものである、という高松の指摘は、こうした言語文化を取り巻く環境においては、ますます重要なものとなろう。しかし、問われるべきは高松の指摘するように、「どこまで書き手が考えているのか」ではなく、現代の言語環境、コンピュータのソフトが提供している書体文化の中で、「文体とは何か」であるように思われる。

人は、どのようにして、ワープロソフトを使用して、文体や人格そのものを印字された紙面に表現することができるであろうか。たとえば、以前であれば、メモ用紙に鉛筆で書き込んでそれをメールボックスに置いておく、あるいはロッカーや下駄箱に置いておく、といったコミュニケーションが、現在は、携帯メールに取って代わった。顔文字やその他のツールによって、“個性的な”表現をすることもできるが、それはあくまでも機械やソフトが提供しているもので、メッセージの送り手はどのような雛形を用いるか、どのような顔文字を使うか、という“選択”をする。以前は物質性（紙や鉛筆、文字、筆跡その他）の次元で個性や自分らしさを表現することができたが、現在はこうした物質性の次元は消え去り、個性や自分らしさはますます純粋な象徴秩序（言語を巡る規約や規則、言語のもつ記号的側面）へと回収されてゆくように思われる。つまり、個性や自分らしさなどの、“自分の

2) 正確には Le style est l’homme même.（「文体とは人そのものである」）この格言はフランスの博物学者 Buffon による。

色”や“匂い”のようなものを出そうとするならば、それは純粋に、文章作成ツールを通じてである。

このような青年期における言語環境は、これまでいかなる時代にも存在していなかったような、新しい言語環境である。この新しい言語環境において、学生たちは如何に自分を表現しているのか、今後学生のemailや学生が作成した電子テキストに基づいて調査してゆきたい。

3. アカデミック・スキルの獲得と青年期の発達課題

3-1. アカデミック・スキルの操作的定義

本研究で考察の対象となっているのは大学生である。大学生は単に自分探しをしていればよいのではなく、学業で一定の成果をあげることが求められている。専門知識の獲得や教養を身につけるという学習過程は、青年期において最も重要な活動の一つとなる。大学における学習は、専門書を読む、図書館で調べる、レポートを執筆する、教員に分からない事項を質問する、など様々な技術の学習とともにある。ここでは、本稿の主題に最も関連する、青年期における言語発達と言語環境という点に鑑みて、考察すべき問題をacademic writingに絞りたい。つまり、最も基本的なスキルとして求められるテストやレポートなどでの説明、問題提起、解決、仮説の叙述などに関する文章の作成（以下、theme writingまたはessay writingとしておく）である。

3-2. 心理学における academic writing skill についての研究

認知科学、心理言語学が取り組んできたdiscourse analysis（談話分析）、text linguistics, 文章作成に関する研究によって明らかになったのは、長い文章を書くこと、文章を要約すること、あるいは文章を読むことは、決して左から右に（あるいは上から下に）という順序性を伴った単線的活動ではないこと、また、外国語の学習に典型的に見られるような、単語レベルの理解から一つずつ積み上げてゆくようなbottom-up形式の行動ではない、ということである（Kern, R. G., Schultz, J. M., 1992；岸学, 2003）。したがって、大学におけるtheme writingやessay writingは、一定の言語運用能力のある学生が行う、非常に高度な認知的操作や問題解決能力を求められる総合的な技術であると言える。

文章作成の過程を特に説明文の執筆に的を絞って研究したHeyesは、大学1年生と熟練教師の説明文執筆に関する比較研究を行い、そのプロセスを図1のようにした。

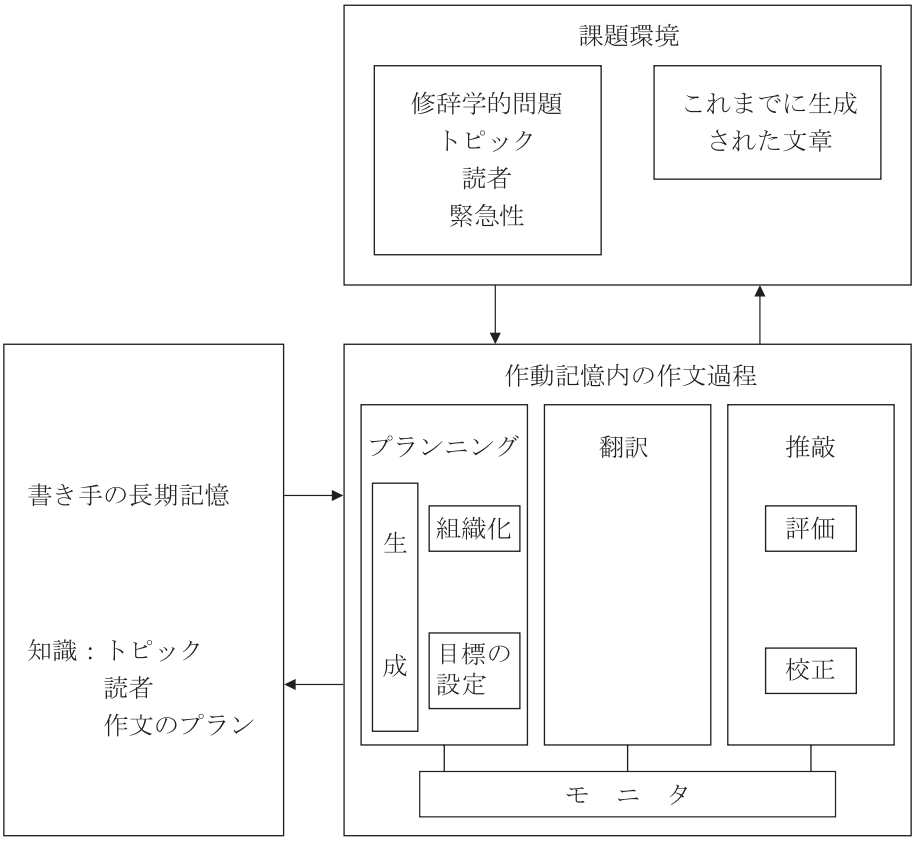

図 1. 説明文執筆過程のモデル （Hayes & Flower, 1990;［秋田 2002 より］）

大学 1 年生と熟練教師との違いは、プラニングと推敲の深さや方略にあるとした。この結果に関しては、紙面の都合から割愛するが、重要なことは、彼が今後の新たな視点として、(1) 文章執筆における作業環境がパソコンか手書きかという物理的道具立て (2) 説明文の執筆に際しての動機や感情面の教育、(3) 文字だけではなく、図表などの情報、そして (4) 文章作成の認知過程を「修正」「プラニング」「翻訳」などといった認知機能のみから捉えるのではなく、自分の書いた文章の解釈と再解釈、そして新たな書き直しという生成過程、の四つの点を執筆過程のモデルの中に組み込まねばならないと指摘したことである（秋田 , 2002）。(1) (3) は筆者が既に述べたパソコンを使用した言語環境にあたり、(2) (4) は青年期における文章作成を発達課題の中で捉えるという視点として整理することができる。そこで、筆者は彼の図を若干修正して、パソコン環境における説明文執筆の仮説的なモデルを図 2 のように構築してみた。

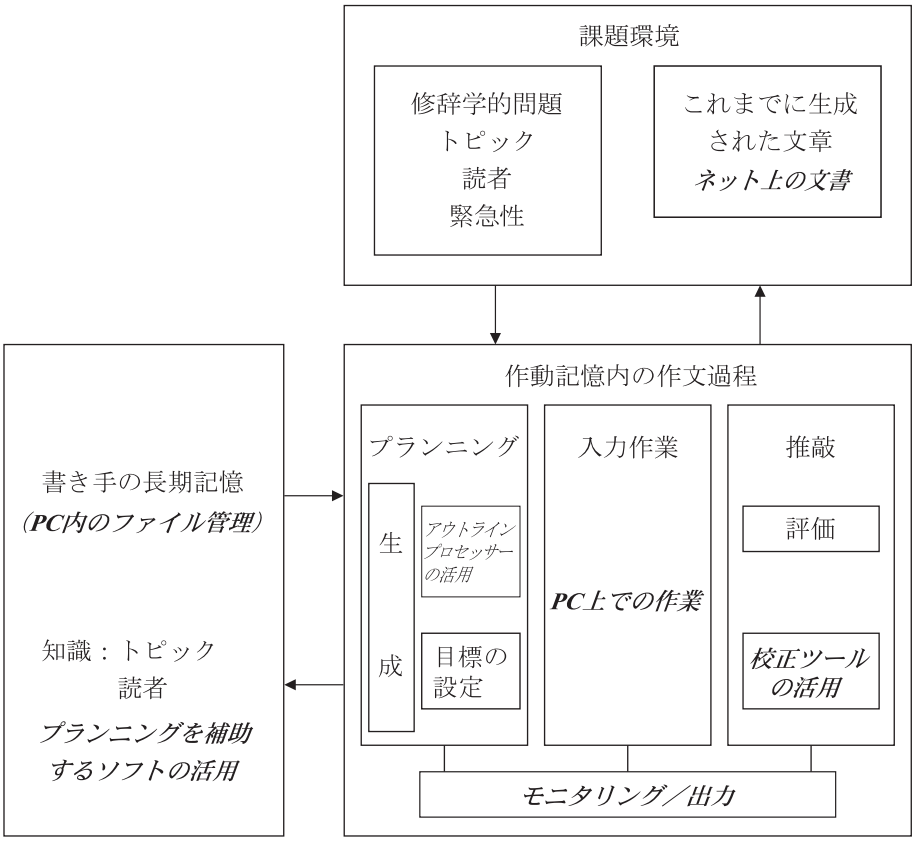

図 2．現代の言語環境を考慮した説明文執筆過程モデル

説明文執筆過程の至る所に、パソコンの技術が要求されることは明白である。青年期における一つの営みとして、theme writing や essay writing を捉えるならば、それは一つの物事・主題を、学習された項目と関連させながら深く考え表現することである。またそれは自分の意見、生きた直感、感情的反応などと向き合いながら、それらを筋道立てて表現していく活動でもある。この意味で、theme writing を一つの自己表現行為として捉えることができる。もちろん、上で紹介した Read, B. らの指摘するとおり、この作業を理想的な形で完遂するまでには、いくつかの困難や制度的な問題（Read, B. らは学生と教員との間の権力関係としている）が存在している。これらについては言語環境の問題として、何らかの解決の方途を見出さねばならない。加えて、青年期の発達という観点から、コンピュータの使用によって考えなければならない点を取り上げたい。それは、narrative のプロセス、及び自己表現活動としての theme writing において、文書があまりに早く社会化されてしまう、という問題である。

3-3. narrative から theme writing へのプロセス

上で、theme writing を akademic な文化における自己表現活動の一つとみなした。もちろん、課題を提示する教員によって、レポートはさまざまな仕方で記述されるべきであろう。たとえば、それが単なる作業的な意味合い（計算、模写など）しか持たな

い場合は、自己表現活動としては見なしにくい。しかし、そうでない場合、つまり学生自身が何らかの素材に触れて、自らの考えを構築するなどといった場合には、自己表現活動としての意味合いが強くなるだろう。その最終的な形としてレポートが提示されるわけであるが、そのレポート執筆に先立ち、学生は手に入れた情報や書物などを自分自身がどのように考えるのか、感じているのかを反省的に考察しなければならない。この反省的な営みは、非線形的で自由な想像力を伴ってなされるものと考えられる。ある主題やテーマについて自分自身の感じ方や考え方、感情の状態や直感などを捉え、それを自分の人生の一部として言語化することをここでは、“narrative”という言葉で表す[3)]。

narrative とは、どのようなテーマを持つものであれ、必ず、自分自身の生活や人生観、生き方と切り離されず、「それは自分にとって何であるのか、どのような意味があるのか、どのように考えたいのか、考えるべきか」ということに関係する語りである。もちろん、それらは他者に向けて語られることもあれば、自分自身に向けて日記のような形で語られることもある。青年期においては、自己表現、自分らしさ、自分とは何か、という自己を巡る narrative が他のどの発達段階においてよりも、強く現れる。theme writing の課題条件として、このような narrative を許す、あるいは、学生にある程度の自由度を与えるならば、学生はより多く自分自身についての経験や考え方、感じ方を文章として表現することができる。一方、教育的観点から考えると、自分の事ばかり述べて何も学んでいない、というのも困る。やまだ（2000）が述べるように、「自分自身がしらずしらずに身につけてきた物語を自覚し、再編し、語り直していくプロセスが教育であり、発達であり、治療である」ならば、この次元への教育的介入は、自分自身の narrative を別な立場から検討し直すこと、自分とは異なる narrative に耳を傾けるような余地を、自らの narrative の中に作ることに焦点が絞られるだろう。そして、別な立場、異なる narrative と自らの narrative が複線的に表現される現場がレポートであると考えられはしないだろうか。

心理学のレポート課題を出してよく聞かれる質問が、“自分の意見を述べても良いのか”というものである。これは、Read, B. らの言うような、“自分の声”を自らの writing の中に含めて良いのかどうかという問題提起であるが、もう一つは、どのように自分の narrative を書いて良いのか分からない、あるいは、そもそも、自らの narrative を見出せないでいることの現れなのではないだろうか[4)]。ここに、問題の根深さがあるように思われる。自分の声を聞く、という自己反省的な行為が theme writing の作業においてどれほど学生においてなされているのかは、今後調査してゆく項目の一つである。

ここで作業仮説を学生の言語環境との関連から提示したい。それは、パソコンを用いた theme writing の作業環境が、上に述べたような narrative の次元を上手く包摂することができない、という技術的問題、また、narrative 的な語りが、手書きの作業やパソコンの無い状態における theme writing の作業よりも早く“社会化”されてしまうため、自分の意見を上手く述べることが困難となる、という問題が考えられる。もちろん、使

3) 心理学では life story という言葉を用いる場合もあるが、同じ意味である。

4) 哲学者の中島義道（1997）は『＜対話＞のない社会　思いやりと優しさが圧殺するもの』において、大学の講義における学生の沈黙について、それがどのような社会背景から生まれたものであるのかを自らの言葉で赤裸々に語っている。

い方によっては、パソコンも brain-storming や自己反省的で非線形的な narrative を上手に表現する有用な自己表現の道具とすることもできる。しかし、レポートを課すと、インターネットから他人の文章をそのままコピー&ペーストして、自らは何も書かない者もいる。その背景には、こうした narrative 的な次元が現代の青年期においては失われつつあり、その場所を埋めるために、インターネットから他人の narrative を自分の narrative であるかのように装う、という事情があるのではないだろうか。また、書けない、書くのが苦手だ、というのは、複線的である意味では不完全な言葉や文章になることの多い narrative 的な営みの痕跡を、紙の上では記すことができるが、それをワープロソフトにおいて記すことが困難である、という技術的な問題としても捉えることができそうである。彼らが文章を書けないのは、narrative の不在と共に、彼らがあまりにも早くパソコンに向かってしまい、本来非線形的、複線的な narrative を単線的な文章へと機械的に“変換”しようとしていることによるのかもしれない。この点についても調査が必要である。

したがって、このようなパソコンや携帯電話などの存在意義が大きくなった言語環境において、いかに学生が自らの narrative を構築するか、あるいは教育者が、学生自らの内的な声を聞くという執筆以前の段階に注意を向けさせるかが、問われなければならない。今日のようなネットワークによって整備された環境では、メールやインターネットを媒介として、様々な他者とコミュニケートすることは容易である。教育者は、学生に自らの narrative に気付かせ、それを大切に記録させること、そして、そのコミュニケーションの現場に関して、調査研究を行うことが重要であると考える。

参考文献

Erikson, E. : 1959 Identity and the Life Cycle. Selected Papers. International Univ. Press.

稲垣佳世子、鈴木宏昭、亀田達也、: 2002 認知過程研究－知識の獲得とその利用－. 放送大学出版会.

Kern, R.G., Schultz, J.M. : 1992 The Effects of Composition Instruction on Intermediate Level French Students' Writing Performance: Some Preliminary Findings. *The Modern Language Journal*, 76, i.

岸学 : 2003 http://www.u-gakugei.ac.jp/~psycho/teacher/kishi.html

Lachman, R., Lachman, J.L., Butterfield, E.C. : 1979 *Cognitive Psychology and Information Processing : An Introduction*. Lawrence Erlbaum Associates.

中島義道 : 1997 ＜対話＞のない社会　思いやりと優しさが圧殺するもの . PHP 新書.

Read, B., Francis, B., Robson, J. : 2001 'Playing Safe': undergraduate essay writing and the presentation of the student 'voice'. *British Journal of Sociology of Education*, Vol. 22, No. 3.

高松正毅 : 2003 「文章表現技術」の理論確立に向けて. 高崎経済大学論集　第 45 巻　第 4 号、175 - 183.

やまだようこ : 2000　人生を物語ることの意味－なぜライフストーリー研究か？－. 教育心理学年報　第 39 集. 146 - 161.